

終戦時の抑留記録（シベリア）

兵庫県 川上 猛 雄

一、八月十五日の放送で敗戦を知り、虚脱状態になりみんなしばらく無言。押し殺したような嗚咽の声がもれてきた。米軍の空襲も止んだ、タコ壺も陣地も既に必要なく虚脱の二日間が過ぎ、十八日午前ソ連軍が占守島上陸、同地守備隊はこれと交戦中我が大隊も占守島に進撃せよと海上輸送隊の準備する大発（車）や独航船に一装の被服で軍装乗り込んだ。夜明け近くフルスピードで軍港柏原に入ると今度は初めて停戦の軍命令を受けた。

二、収容所その他

終戦直前の戦鬪で艦砲射撃による友軍の戦場掃討があり、旧独歩七大隊の戦死者多数勇士を片付けて海岸の火葬は遺骨も集めたのみ。陣地や洞窟

の発破作業と海岸の岸辺に弾薬が入ったまままでの届く所までに放り込んで片付けた。武装解除後横浜へ帰るとだまされソ連のオイルタンカーへ乗り込み、天井から油のしたたり落ちる四日間だった。

着岸した所はアムール河の間宮海峡である。作業は伐採と鉄道で線路の予定地。切り株の根起こしでダイナマイトの粉末を食べたりした。野草や木の皮は腹の足しにならぬ。ホルモリン地区へ二十一年に移動。作業中、ソ連兵の目を盗んで野イチジクを腹いっぱい食べる。食べている最中見つけられて名前を尋ねられたので、乃木マレスケと日露戦争時代の大将の名前を言って作業した。次の朝点呼に名前を呼ぶ声か、兵隊たちは分かっているからクスクスと笑う。シベリアでの頓智の思いの出のひとときです。

馬糞を間違ってジャガイモと思い、ストーブで暖めると悪臭がするので急ぎ処理する始末であっ

た。みんなで大笑いの思い出であった。

三、日本上陸まで

昭和二十二（一九四七）年、三〇一で栄養失調の検査後、昭和二十二年六月四日帰国のため、一番列車で、多分昭和二十二年ハバロフスクからナホトカへ帰り、新潟の目黒さん（ハーモニカの）同行、昭和二十二年六月二十日舞鶴上陸し、二十三日懐かしの故郷へ親戚、肉親と涙の対面で復員でした。

喜寿回想

兵庫県 田中康夫

一、入営、そして北満へ

昭和十八（一九四三）年五月二十七日夜明け前、かねてから狭心症で床に就いていた父が、突然苦しみだし、医師の往診を待ちきれないと言う

ので自転車に乗せ、母が後を押えて医院へ向かう途中、私の背に覆いかぶさるようにして帰らぬ人となった。当日は記念日であり、国民服に巻脚絆で出勤するところ。巻脚絆なしの「喪の日」となってしまう。

その年も暮れるころ、徴兵検査を受ける。村の青年団や職場の友の壮行会を繰り返すうち、ほとんどの若者は入隊してしまった。十九年の夏が過ぎやると令状が来た。「十月一日、秋田東部第五八部隊へ入隊せよ」二年後輩とも一緒になってしまった。既にこの頃の戦況は悪く、「アツツ島玉砕!!」など、報道されていた。戦地へ行けば必ず死ぬ。死ぬことが天皇陛下のため、国のためであるならば、家族のため、自分のために格好をつけて、将校になってやれと考えた。通勤列車では、デッキに出て「軍人勅諭」と「先陣訓」を丸暗記し、体力をつけるため、早朝マラソンをする。

入営の日、多勢の村人に見送られ、加古川駅まで行進する途中、母親へ「戦地へ行けば必ず戦死